

AI 時代の写真と信頼装置論

—社会的表象としての「真実」の再構築—

久住 大 (嶋根ゼミ)
HS22-1059D

論文の目次

序章

第 1 章 写真論の系譜

- 1.1 近代写真の成立と「真実の神話」
- 1.2 写真をめぐる批評的転回
- 1.3 現代写真論と信頼の再検討

第 2 章 写真術の技術史

- 2.1 第一段階「化学的痕跡としての写真」
- 2.2 第二段階「デジタル化による写真の動揺」
- 2.3 第三段階「生成 AI と『写真的リアリティ』の模倣」

第 3 章 社会的表象論の導入と理論基盤

- 3.1 モスコヴィッチとワーグナーによる社会的表象論
- 3.2 矢守の hyper-strong version
- 3.3 AI 画像と社会的表象論における〈subject〉と〈object〉の共生
- 3.4 信頼装置論としての社会的表象構造

第 4 章 信頼装置論の展開

- 4.1 信頼装置論の定義と基本構造
- 4.2 装置と主体
- 4.3 AI による「信頼の模倣」と写真の再定義

第 5 章 信頼装置論への反論と反駁

- 5.1 反論①：光学的・物質的接触の欠如
- 5.2 反論②：機能と本質の混同
- 5.3 反論③：AI 楽観主義への警鐘

第 6 章 ディープフェイクが突きつける信頼の危機

- 6.1 ディープフェイクとは
- 6.2 「疑いの拡散」という新たな危険
- 6.3 信頼の再定義と、現代社会の危機

6.4 信頼装置論から導く対抗策

結論

参考文献

論文の要旨

1. 研究の背景・目的

世界最大規模の写真コンテストにおいて、AI 生成画像（以下「AI 画像」）がクリエイティブ部門最優秀賞を受賞し、作者が辞退する事件が起きた。この出来事は、光学的痕跡を持たない画像であっても写真的リアリティを高度に再現できる生成 AI 技術の到達点を示すと同時に、「写真とは何か」という根源的な問いを社会に投げかけた。

さらに、ディープフェイク技術の進展は、フェイクニュースや政治的操作など社会的信頼を揺るがす危機を生んでいる。従来、写真は「現実を客観的に記録する媒体」として報道や司法の場で「真実の証拠」として機能してきた。しかし、現実との物質的接触を持たない AI 画像が写真と同様の信頼を得て流通する現状は、「写真＝現実の記録」という近代的前提の動揺を示している。

本研究は、AI 画像の登場によって可視化された写真の「信頼の構造」を明らかにし、写真を単なる記録媒体ではなく「信頼装置」として再定義することを目的とする。あわせて、AI 時代における写真の意味と役割を理論的に再構築し、信頼の危機に社会がいかに対応しうるかを検討する。

2. データと分析方法

本研究では、三段階のアプローチを用いる。第一に、写真論の系譜を整理し、近代写真の成立から現代まで、写真が社会的信頼を獲得してきた過程を歴史的に検証する。

第二に、写真技術の変遷を①化学的痕跡としての写真、②デジタル化による動揺、③生成AIによる写真的リアリティの模倣という三段階に区分し、信頼の根拠の変化を分析する。

第三に、社会的表象論を理論枠組みとして導入し、写真における主体と客体の共生成プロセスを検討する。これにより、写真の信頼性が物理的特性のみならず社会的合意形成に依存していることを示し、AI技術がもたらす変化を「信頼装置論」として展開する。

3. 主な知見

分析の結果、以下の主要な知見が得られた。第一に、写真の本質は技術的な「光学的痕跡」そのものではなく、「信頼という社会的構造」によって支えられてきたことが明らかになった。かつて写真が「現実の痕跡」として機能したのは、技術的な自動性への信仰と、それを支える社会制度（警察、報道、科学等）が「写真は現実を写す」という前提を反復的に再生産してきたためである。

第二に、AI画像の登場は、光学的・物質的な接触が欠如していても人々が像を「真実」として信じることを実証した。これは、写真に対する信頼の基盤が決して物質的接触には限定されず、社会的・認知的な枠組みに強く依存していることを逆説的に示している。

第三に、写真に対する批評的展開は、①近代における「真実の写真」の確立、②ソントグやブルデューらによる「真実の編集」という批判的転回、そして③現代における「信頼装置としての写真」への再定義、という変遷を辿ったことが確認された。現代において写真は、客観的な事実の記録から、特定の文脈において信頼を調達するための装置へと変貌している。

第四に、ディープフェイク技術は単なる偽情報の拡散にとどまらず、「疑いの拡散」という新たな危機をもたらしていることが判明した。あらゆる映像がAI生成である可能性を帯びることで、本物の記録写真までもが疑いの対象となり、社会的な共通認識の基盤が浸食される事態が生じている。

4. 考察・結論

本研究の結論として、写真は「真実を写す装置」から「真実と信じさせる装置」へと転換したと定義づけられる。社会的表象論の観点からは、AI画像もまた、受け手との相互作用の中でリアリティを構築する一つの表象であり、写真と同様の信頼構造を持ちうることを示された。

信頼装置論に対しては、「光学的接触の欠如」や「機能と本質の混同」といった反論が想定されるが、写真の歴史的機能が常に社会的制度に依存していた事実を踏まえれば、AI時代においても「信頼」こそが写真の本質的機能であるという主張は妥当性を保つ。

最後に、この信頼の危機に対する対抗策として、技術的本質主義（AIか否かの判別）に加えて、社会的構造としての信頼を再構築する必要性を提示する。具体的には、①画像の来歴を明示する透明性の確保や表示義務といった制度的対応、②真正性検証技術（C2PA等）の活用による技術的対応、③メディアリテラシー向上による教育的対応、そして④社会全体での信頼構造の再定義である。AI時代において写真の信頼性を維持するためには、技術そのものへの信頼から、画像を流通・利用する主体とプロセスへの信頼へと、その重心を移行させる必要がある。

参考文献（主要なもの）

- 飯沢耕太郎, 1996, 『写真美術館へようこそ』講談社.
ソントグ・スーザン, 1979, 『写真論』近藤耕人訳, 晶文社.